

アウトサイド・イン さらに進化・深化

SDGsの公式用語「アウトサイド・イン」が「進化」「深化」の度合いを深めてきた。SDGsの公式文書では「社会ニーズを捉えた目標設定」を指すが、本誌では、「社会課題の解決を起点にした事業創出」と定義した。さまざまな事例を調べると、「アウトサイド・イン」には4つのパターンがあることが分かった。

（オルタナ編集長・森撰、副編集長・吉田 広子、長濱 慎、オルタナS編集長・池田 真隆、寺町 幸枝、羽生のり子、パリ）

アウトサイド・イン [SDGsビジネス戦略]



- ① **プロダクト・アウト** [自社シーズ]
自社の製品・技術を市場に投入
- ② **マーケット・イン** [市場ニーズ]
現顧客のニーズに対応した製品・サービス
- ③ **アウトサイド・インサイド・アウト** [社会ニーズ]
社会課題の解決を起点に製品開発
- ④ **インサイド・アウトサイド・イン** [社会シーズ]
自社の既存技術で現在の社会課題に対応
- ⑤ **アウトサイド・アウトサイド・イン** [未来ニーズ]
未来の課題を想像し、新たな事業創造
- ⑥ **インサイド・インサイド・アウト** [未来シーズ]
未来の社会課題に備えた基礎研究

※⑤と⑥のベクトルは、市場が見つければ、それぞれUターンして、市場に向かう [作成：オルタナ編集長・森撰]

「なんだかゴミがやけに多いな。なんとかならないかな」。2017年10月。「つくばクラフトビアフェスト」の会場（TXつくば駅前）で、アサヒビールの中堅社員、古原徹はつぶやいていた。

パナソニックと エコカップ開発

同フェスは筑波大学の学生の発案で始まり、国内外の100種類以上のビールが飲める大ビール祭だが、当時の会場ではプラ製の使い捨て透明カップがゴミ箱にあふれかえっていた（20年、21年は新型コロナのため中止）。

欧州では20年以上前から、使い捨てではないエコカップが出回っていた。「ウチもエコカップができないかな」。18年7月、東京オリンピック・パラリンピックのパートナー企業技術交流会で、古原はパナソニックのセルロースファイバー成型技術を見つけた。その後のスピードは速かった。

た。12月に試作品が完成すると翌19年1月に役員に提案。3月のテスト販売を経て7月、セルロースファイバー（木質繊維）を55%含む世界初のエコカップ「森のタンブラー」が生まれた。

実は古原はタダモノではない。あまりのヒットで品切れが続いた「スーパードライ生ジョッキ缶」（21年4月発売）の発案・デザイン担当者なのだ。09年3月に東北大学大学院工学研究科修士課程を修了し、同年アサヒビールに容器包装の研究開発職として入社した。

当初は清涼飲料のPETボトル開発を担当していたが、16年には伝統工芸士と組んで「六条麦茶江戸切子ボトル」を開発、「グッドデザイン賞」も受けた。

1人の社員がこれほどヒットを連発するのは、ただことではない。古原に直接、その秘けつを聞いたところ、「社会や地域の課題を解決した

新結合が革新を生む

「森のタンブラー」はプラごみ問題を、江戸切子ボトルは伝統工芸の伝承課題に取り組んだ。

古原はこれにとどまらず、上司に掛け合って22年1月、社会課題解決型の新組織「アサヒユアス株式会社」の立ち上げを主導した。社長には、

古原の相談を受けた上司の高森志文が就いた。同社のパーパス（存在意義）は2つある。「地域課題解決に貢献すること」と、「循環型社会形成に貢献すること」だ。

古原は、通常なら捨てられる食材を利用したサステナブルクラフトビール「UPCY CLEB」を開発、販売を始

めた。このうち「蔵前BLA CK」はカフェのコーヒー豆、「蔵前WHITE」はサンドイッチ屋さんのパンの耳を使った。

クラフトビール「狭山GREEN」は埼玉県狭山市のお茶屋さんから引き取った茶葉の未利用部分を、「さんむRED」は千葉県山武市のいちご狩り農園で余った冷凍イチゴをそれぞれ材料に使った。これにより食品ロスを少しでも減らすという試みだ。

ごみを溶かして 新しい肥料に

「静岡市から新しい肥料モデルを全国に発信します」。静岡市長の田辺信宏は22年6月、静岡市役所で記者会見を開き、高らかに宣言した。

その仕掛け人は日鉄エンジニアリングだ。同社はもとも

と日本製鉄（当時は新日鉄）のエンジニアリング部門だったが、06年に分社・独立した。天然ガスパイプラインや風力発電などエネルギー分野が強いが、全国49カ所でのゴミ処理施設も建設・運営する。

その一つが静岡市の西ヶ谷清掃工場だ。ここでは一般家庭ごみを焼却（通常800〜1000℃）するのではなく、

1600〜1800℃で溶融する。すると、その溶融スラグ（残さ）が残る。その成分を調べたところ、可溶性ケイ酸やアルカリ分に富み、特にイネ科の育成促進に効果がある事が分かった。

イネの表皮が強くなることで病虫害にも強くなり、農薬を減らせる可能性もあるという。海洋では、溶融スラグを含んだ藻場ブロックを作ることで、海藻類やアワビなどの生育効果が期待できる。

この溶融スラグ肥料「SKケイカル」は22年3月、農林水産省が肥料として「本登録」を認めた。これを機に、JA静岡経済連の協力も得て、拡販を目指す。

日鉄エンジニアリング取締役常務執行役員（環境・エネルギー）セクター長の鈴木隆は、「静岡市のモデルは、まさに国が推進する『地域循環共生圏』の構築に資するもの。市や静岡大学、経済連の協力を得て、他地域で積極的に展



「生ジョッキ缶（右）と「森のタンブラー」（左）を開発したアサヒグループの古原徹氏



静岡市役所でスラグ肥料を発表した田辺信宏・静岡市長（左から2人目）